16　梅花書屋之図　田能村直入

一幅

明治十七年（一八八四）
絹本着色
一二七・八×五六・六

高潔な君子の象徴である梅が咲く人里離れた山奥に質素な庵を構え、俗事にまみえずに高士が読書などを楽しむ情景を描いた「梅花書屋」は、文人のひとつの理想として、中国そして日本の文人画家たちの好んだ画題であった。本図の作者田能村直入（一八一四～一九〇七）は、豊後国（大分県）直入郡竹田町に生まれ、九歳の時に田能村竹田に師事し、その姓を継いだ。明治元年（一八六八）に京都に移り、以降京都博覧会の開催、京都府画学校の設立、南宗画学校の開校、日本南画協会の結成など京都画壇における近代南画の成立に大きく尽力したことで知られる。

直入は中国絵画を手本として摸写による学習を重ね、また中国の画論書にも精通して宋元明清の諸家の画法に習熟していた。本図の画面構成や岩塊、山容の描法などは、《太華山図》（作品番号13）のような清時代の山水画、とりわけ青緑山水との近似性が明らかであり、直入の中国絵画学習の成果が見て取れる。ただし、梅花の白色の他にも様々な色味を織り交ぜた木々を配置する明るくにぎやかな画面には、中国絵画とは一線を画した日本の文人画独自の色彩感覚が表れている。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

名所絵から風景画へ――情景との対話

三の丸尚蔵館展覧会図録No.76

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成二十九年三月二十五日発行

© 2017, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan